

■ 住職戯言



「人といふ字がそのままに、慈悲といふ字と心得よ」

(『善悪種蒔鏡和讃』 伝白隠禅師作)

---

「包まれて生かされている」

大徳寺派竺園寺 渡邊恭山

世の中の情報化に連れて、スマホが欠かせないものとなってしまったようだ。たまたま、電車に乗ると、大人から子供まで皆、スマホをじっと見ている。人と繋がっているような気分なのだろうが、傍から見ると人との縁をすべて絶ってしまったかのように無表情なのだ。

人と人が、手を繋ぎ合い、面と向かって言葉を交わしていくことが、ご縁の源となる。そう考えれば、ご縁の妨げになるのではないかと思っている。

ご縁を考えた時、大事なものは、人を真から思うこと、つまり、慈悲である。

慈悲とは、人と悲しみを共にし、人を大切にしようと願う心である。

臨済宗の中興の祖である白隠禅師の作と伝えられる『善悪種蒔鏡和讃』に「人といふ字がそのままに、慈悲といふ字と心得よ」という一節がある。

人であれば、慈悲の心を忘れてはいけないということなのだ。

「人」という字は、甲骨文字の時代、腰折れの人偏のような形をしていた。これは、人が立っている姿を横から見た形ということだ。

まるで、苦しみに膝をついてしまった人に手を差し伸べるような形をしている。

これは、「包」という字の上の形に似ている。

言ってみれば、人が人を包もうとしているのかもしれない。親が子を包むように、苦しんで

いる大事な人を包むように。それが、本来の人の心ということなのだ。

ある平日の午後、私は、あまり混んではいない電車に乗っていた。衣を着ていたので、両手で吊革をつかんで、あらぬ疑いを掛けられぬように車両の後ろの方で立っていた。

周りを見ると、外回りのサラリーマンも、買い物帰りの主婦らしき女性も学校帰りの小学生も皆、スマホをじっと見て、時折文字を打ち込んでいる。

皆、無表情なのだ。周りに人がいないかのように、自分の世界だけに没頭している。電車の車窓に映る秋晴れの空も、周りの人々とも絶縁して、スマホの小さな窓に映る世界に行ってしまったのだ。

駅の手前で、電車がブレーキをかけた。電車の突然の揺れに驚いている人がいる。前の方で、スマホに没頭して立っていた小学生が、揺れに身体を支えられずに、転んでしまったようだ。

「あっ」とは思ったが、小学生は、何事もなかったかのようにスマホの世界に戻り、無表情になってしまった。

周りの大人もそれ以上、声を掛けずにスマホに意識を集中しだした。

私は、それを見て、なぜか、昔の光景が頭に浮かんできた。どこかは忘れたが、私は駆け出していた。そして、転んでしまった。膝に血が滲んでいる。

すると近所のおばあさんが、私を立たせ、砂を払い、痛そうな顔で「痛いかな、痛いなあ。よしよし。水で洗って、赤チンをつけてやるからなあ。もう大丈夫だよ。」と微笑んだ。

私は、恥ずかしくて「もうそんな子供じゃないのに」と思ったが、それでも、安心感に包まれているような気がした。

痛みを共感して、大丈夫と励ましてくれる。おばあさんは、慈悲の心で包んでくれたのだ。

人はご縁の中で、生かされている。自分を大事に思うなら、ご縁を大事にしなければいけない。

そして、ご縁を大事しようと思えば、人を大事にしたい。

人は、包み、包まれて生かされている。

忘れないようにしたい。